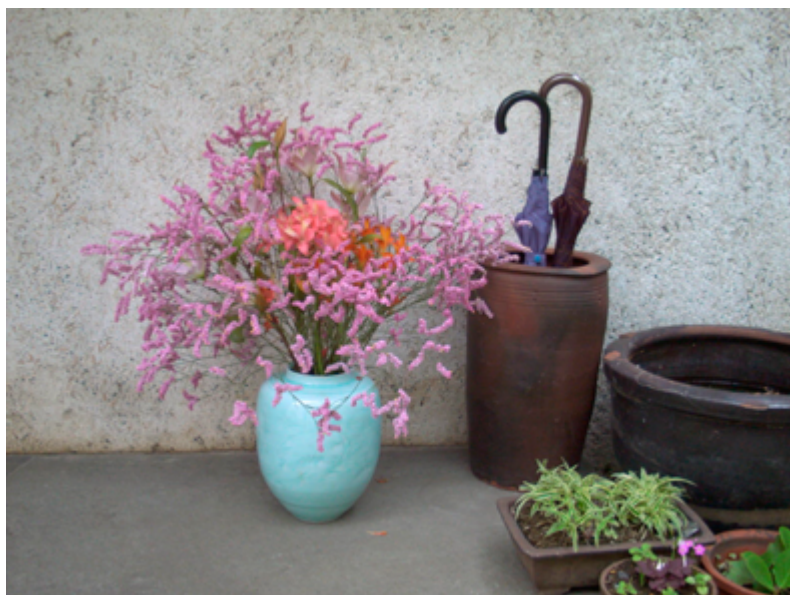


あを 3
2015



浅間山



須賀忠男

呼称 あさまやま

標高 2568m

菜の花の中を浅間のけぶり哉
長閑さや浅間のけぶり昼の月
浅間から別て来るや小夕立
湧清水浅間のけぶり又見ゆる
今来るは木曾夕立か浅間山
蚊の声やほのぼの明し浅間山
雁鳴や霧の浅間へ火を焚と

小林一茶

あそ

三月



徑

佐藤喜孝

東京

黄落の裏を返すとまくれなみ

臥してるか立ってゐるのか秋のくれ

踏切のなかで仰げり冬なかば

まつすぐな松を見たしよ冬の海

吹上の水に冬日に濡るる鶴

英吉利のやうな日だまり冬薔薇

枯薄徑があるので逸れて行く

わたしの団体生活は小学校入学からはじまる。戦後まもなくの小学校はわが家と同じく焼け出され校舎が足りなく、青空教室・二部授業が当り前であった。ランドセルは父がどこからか都合してきてなにかの油で革を手入れしてくれた。それを背負ひ校庭に並んだ。校庭での入学式である。名前順にでも並ばされたのであろうか。隣りに並んだ女の子に声を掛け名前を尋ねた。随分と大胆で積極的でわたしではないやうだ。女の子は「オウマ」といった。ビックリした。「お馬」と聞いたのだ。本間さんの家は坂の上で、わたしは坂の下に棲んでゐた。何年生の時か忘れたがわが家も坂の上に引越した。下校時は本間さんと二人で帰った。近くに今はない洗濯機の工場がありお昼時や三時に工員さんが道路に出て休んでゐる中を帰った。いまでも本間さんの家はあるが、人が暮してゐる様子がない。

☆

王

岩
愛知

東風吹いて酒旗翻る町外れ

故郷へ我が無事告げてつばくらめ

渡し場の柳は青し旅送り

母のゐる故山賑ふ旧正月

爆竹の響く故山や夢の中

海越えて心は国の旧正へ

南山に馬放ちたる日永かな

手を引いて

大日向幸江

埼玉

初泣の母の背中に隠れたり

寒の入り鳩に雀に寄添ひて

年男に潦をばとびこして

新成人肩を組合ひ初詣

手を引いてくれる猫居り恵方道

冬薔薇海に向ひて異人館

手の甲で鼻水を拭くパンダ前

春節は中国のみならず、全世界の華人にとって最も重要とされる伝統的な祝日である。春節の起源は虞舜の時代に遡ることができる。春節は旧暦の正月初一を指すが、俗に「過年」と言う。民間での習慣では、「過年」は旧暦十二月八日の臘祭または旧暦十二月二十三の祭竈から旧暦正月十五日の元宵節までの期間を示すものである。その期間中では、除夕（大晦日）と正月初一をクライマックスとする。二〇一五年の除夕は2月18日で、翌日の19日は旧暦の正月初一に当たる。

春節が近付くと、人々は年画（新しい年の幸福や豊作などを願って、門や入口の戸や居間の壁などに貼る。

44頁につづく。



齊藤 裕子

東京

着膨れて目だけ動かすバギーの子
身構へて子猫飛び来る毛糸玉
日向ぼこ円座に子猫納まりて
黒豆も上手に煮えて除夜の鐘
海苔だけは上物にして年用意
御降をちらとも見らで寿司を巻く
松明けに百四歳や大往生

☆

佐藤 恭子

東京

踏まる草見る背の冬日かな
小雪舞ふ口からもれる句のはしり
雪の富士鴟尾にのせをき日暮るる
際やかに満月冬をいきいきす
冬蒼天水面に浮きし葉それぞれ
水底を冬の日狂ほしく走る
雨雲をぬぎすて新月三日かな

子供の頃、私の近所ではこの家でも猫を飼っていた。他所の家に行くとき縁側や、軒下に高く積まれた薪に干してある座布団の上など、どこかに昼寝している猫の姿を見たものだ。そして、土間や台所の片隅に、猫が食べた汁掛けご飯の皿が置かれているのも、よく目にする光景だった。私の家でも大概猫の餌はご飯に味噌汁をかけただけの物だった。家族が食べた魚や骨付鶏肉の残骸が出る時は、猫には御馳走だったに違いない。

最近我が家に猫の「まさむね」が度々やってくる。私も、猫の親馬鹿さながらに、ペット食品コーナーに足を運ぶようになった。その種類の豊富さに驚かされる。子猫用から成猫用、年齢に合わせてレトルト食品、何と介護用食まで揃っている。猫の健康を考慮されている。子猫用を買ってきて「まさむね」に与えると、ドライフードより美味しいらしく、すぐ飛んで来てあっという間に平らげてしまう。猫も賢沢になったものだ。そうさせたのも人間なのだが。しかし、「まさむね」はそんな事情など知らぬ事と、今も藤椅子の上で丸くなって気持ち良さそうに眠っている。

テレビを見る時間は食事の時と疲れて来た午後四時頃のお茶の時間だ。その時は録画をしておいた番組を見るのが常である。

サッカー番組もあれば時代劇もある。お気に入りには「相棒」。同じような番組と比べると脚本家がいいのか、無駄な動き納得いかない動きがない。「ガイヤの夜明け」これも毎週予約済み、先日番組の中で若い三十代の若い企業の社長が言った一言「日本人は優しすぎる他の国の人に」と。騙されるとのこと。そんな話を聞いていたらいい国に生まれたのかな！と。嫌な方向に動いているように感じている昨今だが、しっかり頑張っている若者もたくさんいることに心が穏やかになっていった。

☆

芝宮須磨子

東京

孫七人曾孫八人賀春かな

毎日を無為に過しぬ温め酒

冬夕焼青梅街道まぶしめり

南窓に日照めぐりて友と居る

手芸教室あれこれ意見糸糸編む

☆

篠田 純子

東京

鉛筆を舐める癖あり卒業す

墨堤にやはらかき風入彼岸

彼岸桜水上バスで菩提寺へ

亀と鯉行き交ふ池に梅薫る

REAL LOVE流れる麵麩屋風ひかる

傷負うて恋猫帰る昼餉どき

うら若きをんな鷹匠手負ひけり



来月、待望の、年金の貰える誕生日がやって来る。しかし想像していた額より年金は、少額だ。衝撃だ。お風呂券が貰えたら、孫と銭湯に行きたい。私の住んでいる所は歩いて行ける銭湯が三軒ある。問題は、湯が熱いことと、孫が女湯に入るかどうかだ。湯上りに何か飲みたい。いろいろな入場券が割引になるのは嬉しい。浜離宮の年間パスポートは直ぐに買おうと思っている。海外旅行にも行きたいし、美味しいものも食べたい。しかし年金は全部貰わず、あと一年働く事にした。貧乏性なのか、今年は、国勢調査の仕事もする予定だ。追い詰められ、追い詰めて俳句をしぼり出して行こうと思っている。勿論、怪我と健康に気をつけつつ。

日脚のぶ

定梶じょう

石川

土管あり枯るる野を来て腰下ろす

影のあることをたふとび日向ぼこ

初日得て野面積み石拮抗す

潮さみの規則ただしき初み空

おむすびは伯方の塩にかぎるとふ

風化地蔵吹雪のあとの目鼻かな

母がちよき出せばぐう出す日脚のび

一月

須賀敏子

埼玉

原発が再稼働とか去年今年

蠟梅の百本の香や新名所

小江戸なる城下町にて福詣

カーナビに逆らってる冬の旅

幼等の長きシユプール追ひ着けず

留袖のリメイクなって春着とす

三日はやクロワッサンの恋しかり

一つの言葉が内容を深める、ということ詩歌ではよくあって、その逆も勿論あるのだが、

山去るにつけて一位の実ぞ赤き

木村蕪城

の「につけて」の措辞の宜しさや、

はつそらのたまたま月をのこしけり

久保田万太郎

の「たまたま」も同様、句を面白く

している。

レールは偶数である管大操作場夜業

佐藤喜孝

この句の「管」が何ともあざやか。

仮に「管」の措辞がなくこの句は成り

たつし、それだけでも相当面白い句だ

が、「偶数である管」とあって沢山集

中しているレールの中に、もしかした

ら一本あるいは二本、消滅しているか

も、なぞと不思議な錯覚を起させると

そういう「管」なのだ。



☆

竹内弘子

埼玉

幹の憂さひり出す棕櫚の花咲けり
すでにして御苧のこの世ならぬ軽さ
ぬきさしのならぬ海鼠とおもひけり
蟬殻を雑誌の上におく晩夏
新島のくさやに濁酒酌まんかな
夕鴉や島の電線ひくきかな
浦島の子の裔にして木の葉髪

一月

田中藤穂

東京

七鉢の蘭蕾ある除夜の鐘
御朱印へ長蛇の列や冬桜
七草や唐土の鳥にウイルスが
どっと来てみな着ぶくれの雀たち
雨戸開け冬残月が目の前に
夕焼雲一月の椎離れずに
紫陽花の冬芽太りて誕生日



以前は暮正月は湯沢のマンションで娘夫婦や孫達と過ごしていたが孫達も成長して結婚し子供も出来て人数が増えたので、私は家で一人で過ごす事になっている。舅がいて主人の弟達が家族を連れて集まった頃のお正月とは雲泥の差だ。あの頃は私もまだ若かった。今も門松だけはちゃんとたてることにしている。

元日は着いた年賀状をみたり書き足した賀状を出しに行ったり。松の内に子供達がお酒やら食べる物を提げてやってくる。近頃はもう元日から駅中の店でお鮓でも天ぷらでもなんでも売っているぞつた。

表へ出ると七福神巡りの人に田端の東覚寺を訊かれたり日暮里の青雲寺を訊かれたりするのが、ちょっとお正月らしい。

寒あやめ

長崎桂子

三重

電気設備故障困惑去年今年

元日のひととき美しくちらめける

雨戸引く三日の明けの吹雪かな

荒海を楽しみ浮ぶ冬鷗

七草や五体に常の戻りつつ

寒風に幾日さらす麵すだれ

紫は伝統の色寒あやめ

寒 雀

森 理 和

東京

寒雀駅のベンチに群れ遊ぶ

顕るる雀蜂の巣日向ぼこ

ビニール紐のぞかせ古巣小きかな

とける日も溶けぬ日もあり薄氷

定休日ケーキ屋さんは大根抜く

土付きの抜きたて大根食べなよと

凸柑を買ひ込み過ぎし肩替へる

年が改まりました。年頭に当りと言ふ言葉を何十回も耳にしてみました。が、さて、私はと言え、なにを語り、何を誓つか浮かんでこなくて、吾ながら情けなくて、心許ない次第です。

ともあれ、慌てないで怪我をしないよう。毎日を暮らして行きたい、それが切なる念願です。

七日の朝馨しさが何となく漂っている様でよく見ると、三年前に友人に戴いた、寒あやめが、うす紫で直径八厘あるのが二輪も咲いて香りを放っている。嬉しくて、一日中明るい気持ちで過ごす事が出来ました。



☆

山莊慶子

埼玉

葉牡丹の凜と上向き新居なり

児のやうに犬抱いてゐる寒さかな

寒鴉落せし胡桃はずれかな

風と雪の帰路となりたる家族待つ

風花や励すことの難しき

ふとよりし店に見付けし種袋

ひたすらに繭紡ぎをり煌めける

寒玉子

赤座典子

東京

帰りきし写真の人に初明り

嫁の引く大々吉の初みくじ

祖母という役有難し寒玉子

仄と咲く啓翁桜四日かな

初日記浅酌低唱目指さむと

小豆粥砂糖を入れる夫であり

漆黒の富士を縁取る寒茜



昨年の「あを」12月号で阿部寒林先生の訃報に接した。傳句会で、色々と教えて頂いた方にまた一人会えなくなってしまった。

寒林先生にはその昔「良妻も賢母も難し寒玉子」という句を、天賞にとっていた。今回も寒玉子でと思い「祖母という役有難し寒玉子」となった。

寒玉子へのイメージが強さから貴重なものを表すものへ変わったのは、十年近く経っての、環境の変化であろう。

寒林先生の、句会での折にふれ厳しく、且ユーモアのある寸評も懐かしく改めてご冥福を心よりお祈りしています。

☆

井上石動

山梨

冴ゆる夜のベテルギウスや影たしか

昨夜の雪熄みて下界の灯かな

上の子へ小走りマスク随へり

紅灯や福生駅うら関東煮

行儀よき明治の人ら菜の花忌

つくづくと世渡り下手やシクラメン

うす霞日矢一条の大菩薩

俳句広報大使 夏井いつきさん

不定期に放映されるTBSの「バト才能ランキング」は番組名録画でかならず観ている。タレントたちが、陶芸や立花や料理盛付その他いろいろなジャンルに挑戦し「才能ありなし・凡人」などのランク分けされる。私にとっては、句作の佳き師匠となつてゐる番組。

そのひとつとして「俳句」も必ず登場する。それらを夏井さんが、添削しつつ、おおいに貶したり褒めたりする。夏井さんは、いろいろな機会で放送に乗っているが、この番組での添削は素晴らしい。ダメ句が添削ひとつで変貌・・・を、俳句に馴染んでいない視聴者が見れば、驚き、「じゃあ私も」となつてくれるかも。さすれば、じつに偉大な役割を夏井さんがしてくれている・・・と。

俳句界にこういうタレントがいることの僥倖を思う。

現若手は「開成高校↓東大」が主流のようだが、出でよ市井の一般若手！

二月作品より

齊藤裕子・佐藤喜孝

行く雲の用あるごとし日向ぼこ

佐藤喜孝

季を待つ伸び伸びと裸木の

大日向幸江

晴れた日は2階の部屋で日向ぼこしながらよく空を見上げる。雲一つない時もあるが、一つ二つ浮かんでいるのを眺めていると、雲の形が何かの動物に似ていたり色々変化していくのが面白い。作者の見た雲はどんな形をしていたのでしょうか。風にどんどん流されて遠くへ行つてしまったのでしょうか。その様子を「用あるごとし」と詠む事で雲の流れっていく速さまで伝わってくるようです。「日向ぼこ」の季語が、ゆつたりとした気分の作者を想わせ、用あるかのように忙しい雲の動きとの対比もあつて、とても面白いと思いました。(裕子)

葉っぱを落とした裸木は、見る人の気持ちによつては寒々しく厳しい感じを受ける時もあります。しかしこの句は「伸び伸び伸びと」で、春の到来を待つ裸木の命の喜びが感じられる句だと思いました。寒い日も元気に外へ出て、公園や家の周りの木々や草花と対話している作者。「伸び伸び伸びと」はそんな作者の明るい気持ちと重なるような気がします。(裕子)

はらわたにうぶふぶと落ちし温め酒

佐藤恭子

佐藤さんご夫婦にはお酒の句がよく出てきます。一月号の「秋の宵瓶酒透して見たくなり」に続き、この句も楽しいお酒の句。喉元を通つ

て「温め酒」が「はらわたに」落ちていく、その幸福な感触がお酒を飲まない人にも伝わってくるような句だと思いました。「うふふ」がお酒を楽しんでいる作者の心持ちを表しているのでしょうか、温め酒の方も、美味しく飲んで貰ってありがたい、「うふふ」と喜びながら腑に落ちていく。そんなとても楽しい句だと思えます。余談になりますが、恭子さんはそんなに沢山お酒は召し上がらないとか。お酒の句の多さは酒量には比例しないようです。あまり飲み過ぎてはこんな良い句は生まれられないのではないのでしょうか。(裕子)

草紅葉石の貨幣に縞模様

斉藤 裕子

石の貨幣はヤップ島の「石貨」のこと、日比谷公園に行くで見ることが出来ます。石の貨幣に縞模様を認めた。そこに作者は興味を抱きお

しやれな一句をなした。草紅葉と縞模様、が詩情を醸してゐる。力を抜いた句も大切な宝物である。(喜孝)

蠟梅を突き抜けてゐる光かな

篠田 純子

蠟梅の木を突きぬけてゐると云ふより、一花をクローズアップしたのでせう。その蠟梅の花びらを光が突きぬけてゐる。蠟梅花を読むと云ふより主題は「光」を詠つてゐます。はなびらを透して読手は早春の光を感じます。蠟梅の鮮やかな黄色とともに……。〈臘梅を光素通りして行きぬ 山田天〉と比べると掲句の勢ひ・現実感がよく分ります。「ゐる」と「行きぬ」の違いに注目しました。

他にも〈密猟の鹿肉なのと微笑みて〉〈極月や歯医者に耳も診てもらふ〉の諧謔を楽しませて頂きました。(喜孝)

冬帽の後姿はあの人か

田中 藤穂

作者が見ている「冬帽の後姿」の「あの人」は現世の知人を指しているのでしょうか？作者は「あの人か」と思っただけで、声をかけたり追いかけて確認したりはしていません。後姿でその人と分かるという事は、とても親しい身近な人だと思うのですが、何故かこの句を読んだ瞬間、「あの人」は今はない大切な人を指しているような感じを受けました。冬帽の後姿があまりにも今亡き大切な人の後姿に似ていた。ちよつと胸がきゅんとするような不思議な一瞬を捉えた句と想像したのですが……。 (裕子)

青のまま空清みすぎる開戦日

佐藤 恭子

空深きは奈落と思ふ開戦日

定梶 じょう

登校の道に開戦ニユース聴く

田中 藤穂

「開戦日」といっても真珠湾攻撃の日のこと、21世紀に入ってからでも戦争は止むことなく起り十数回の戦争があり今でも続いてゐる。たまたま二句は空を見ての感慨であります。昭和十六年のその日の天気はだうだったか知りませんが、句を詠まれた日は「清みすぎ」て「奈落」のやうであった。この語彙でふたりの俳句表現へのアプローチの違いがわかります。終戦から七十年、曲りなりにも戦争もなく過してきたのはありがたいことだと思ひます。藤穂さんの句は七十三年前の回想の句です。きのふのやうに鮮明に思ひ出されるのでせう。(喜孝)

誕生を心待ちして毛糸編む

森 理和

お孫さんの誕生が近いのでしょうか。編んでいるのはおくるみでしょうか？編み棒を動かした

がら、編んだおくるみで赤ちゃんを抱っこする
 日を思い浮かべる。そんな幸せな時間を過ごして
 いる作者が目には浮かびます。元気な赤ちゃん
 が生まれることでしょう。(裕子)

腕章に冬日のあたる昼つ方

赤座 典子

おもしろい事象の切り取り方である。情報伝達には
 「5 W 1 H」が必要と説かれてゐる。「5 W」(When)「
 じいつ」(Where)「だれが」(Who)「なによ」(What)「
 なぜ」(Why)「どのよう」(How)「これに」誰に
 (Whom)」を加え6 W 1 Hだとも聞く。掲句はこの
 条件を大幅に無視してゐる。俳句は情報伝達の手段
 の一つかも知れないが、ニュース原稿とはまた違ふ。
 「腕章」は何の腕章だか解らない。冬日が当って
 るところからみると屋外の昼間だといふ事。通行
 人やそこいらに集つてゐる人と区別する腕章。人々
 に指示・注意を与える立場も人かも知れない。職業

なのかボランティアか。さういへばわたしはまだ一
 度として葬式でさへ腕章を付けたことがない。腕章
 に昼の日差しが当つてゐることだけに注目してあ
 る。そしてその腕章を巻いた人間を描かうとしたの
 だらう。しかしこれだけの情報では顔が見えてこ
 ないが、魅力がある。やっかいな俳句だ。書終へて
 ふとじょうさんなら上手く書くだらうなあとと思つ
 た。(喜孝)



あをキーワード俳句辞典(けさーけし)

袈裟

富士山を袈裟懸にして夏の雲
 新緑の袈裟丸山に寝釈迦在り
 大袈裟にも言うてみる遠霞
 袈裟掛に土付く遠藤秋暑し

今朝

黄色なる堅香子の花今朝の夢
 今朝ことに水温みをり箸洗ふ
 蝸牛今朝も聞こえる孫の声
 額の花今朝またボタンかけ違ふ
 甲斐駒は雲寄せつけず今朝の秋
 カーテン開け空をあをと今朝の秋
 風立ちて烏瓜今朝鳥になる
 筆匠の庭に白梅今朝ひらく
 とりあへず背筋伸ばさむ今朝の春
 今朝秋の蜩香に立つ久慈の宿
 雲脚のはやみて今朝の濃紫陽花

松本 米子
 須賀 敏子
 芝 尚子
 篠田 純子
 須賀 敏子
 河合 笑子
 吉成美代子
 芝 尚子
 栢森 定男
 松本 米子
 東 亜 未
 関口 ゆき
 赤座 典子
 渡邊 友七
 吉弘 恭子

露の臺の香に充たさるる今朝の膳
 強東風や今朝は鴉も乾び声
 ことさらに紅茶芳し今朝の秋
 今朝の秋診療室はしづかなり
 諳する奥の細道今朝の秋
 今朝の春白髪の見ゆる鏡かな
 今朝の卓茄子つややかに皿に乗る
 今朝秋のポストの色が怪しからぬ
 飛ぶものがとぶものを追ふ今朝の秋
 長長と蝌蚪の紐置き今朝の池
 手袋のやうな靴下今朝の冬
 古利根に鷗きてをり今朝の冬

気色

初富士や不穩の気色寄せ付つけぬ
 魚は樹に登る気色ぞ琵琶湖初夏

景色

溶岩の重なる景色やなざらん
 光琳の水に白鳥置く景色
 バイソンの沈思も夏の景色にて

長崎 桂子
 斉藤 裕子
 芝宮須磨子
 早崎 泰江
 田中 藤穂
 王 岩
 森山のりこ
 定梶じょう
 篠田 純子
 森 理和
 大日向幸江
 佐藤 喜孝
 早崎 泰江
 井上 石動
 芝 尚子
 関口 ゆき
 竹内 弘子

書初のやうに一句をつくりたる 佐藤喜孝

竈猫わらふ木喰仏は煤 井上石動

冬の暮屋根の瓦に入る雀 大日向幸江

草紅葉石の貨幣に縞模様 齊藤裕子

青のまま空清みすぎる開戦日 佐藤恭子

蠟梅を突き抜けてゐる光かな 篠田純子

空深きは奈落と思ふ開戦日 定梶じょう

目薬を点して一分年惜しむ 須賀敏子

蠟梅の枝に恋々たる冬日 竹内弘子

後手に閉める独りの障子かな 田中藤穂

冬晴の清しき空気味はひて 長崎桂子

表紙には夢二の莓日記帳 森 理和

遺されていていつもの年の瀬となりぬ 山荘慶子

腕章に冬日のあたる昼つ方 赤座典子

枯芝の大きいなるあり四角なり 佐藤喜孝

喜孝抄



馬酔木 二月号
 遊蝶花風立ち春はをのゝけり 水原秋櫻子
 眼前の枯野たしかに來し覚え 徳田千鶴子
 人蔘が好きで反骨つらぬけり 々
 桜島噴くや開聞岳眠り 水原 春郎
 沖 二月号
 炬炬りの鬼の件に尾鱗あり 能村 研三
 初鏡まだまだ額に皺の余地 千田 敬
 風土 二月号
 美しき妻の忌日やクリスマス 神蔵 器
 火星 二月号
 衝立のくれなゐ褪する猪の宿 山尾 玉藻
 峰 二月号
 戻り来て一円拾ふ二月尽 布川 直幸
 みづかきの跡のちらかる春の沼 々

末黒野 二月号
 冬空の紫紺へ発てり伝書鳩 小川 玉泉
 万象 二月号
 群はなれ妻と勤労感謝の日 大坪 景章
 日吉館ありしあたりの雪螢 内海 良太
 こだま 一月号
 弓道場に椿の添ひて凜々しかり 松林 尚志
 不入斗
 黄に染みし白鳥は飛びつづけをり 高橋 龍

雨月 二月号
 メタセコイア太古の様に枯れゆける大橋 暁
 萱 二月号
 老い先は雨の日風の日雪降る日 亀田虎童子
 かたむけてバスに乗りくる大熊手 小島 良子
 鴨 二月号
 箸紙に書いてつくづく我が名なり 井上 信子
 ゴブラン織ほどかれつつや紅葉散る 高橋 道子
 時雨傘開くに庇借り申す 荒井 和昭
 るんど 二月号
 炎を上げしシェフの後の冬の家 すぎき巴里
 らん 68号
 芒野を跨いでいった翁かな 鳴戸 奈菜
 無花果の糜爛灯ともる毛皮店 藤田 守啓
 六花 二月号
 とりわけける爪美しき節料理 山田 六甲
 ホトトギス 三月号
 人悼みつもの芽に膝を折る 稲畑 汀子
 青饅に暮れゆく京の路地の奥 稲畑廣太郎
 雲の峰 三月号
 春めくや自力で湯浴みせる妻も 朝妻 力



鍼力屋に鑄掛屋に降る春の雨 高橋 龍
 目の池に睫毛はあやめかきつばた
 蟬の穴深く静かに頭の中へ
 資本論いっぱし読んで蚊帳に入る
 皇統はあみだくじなり残り菊
 俳句通信 VOL 84
 踏切の音か木魚か日向ぼこ 草深 昌子
 日短ことに海辺の平屋建 坪内 稔典
 日本に憲法九条葦芽ぐむ 々
 戦争のない七〇年あつ、なげな 々
 梅開く戦争放棄した国の 々
 道端のオランダミミナグサ平和 々
 東風吹いて日本は戦争放棄国 々
 七〇と十歳歩く雲は春 々
 一心に寄り来る真鴨待つてやる 下鉢 清子
 紅梅の苗木ばかりの花ざかり 飯田 龍太
 思ふこと置くやうに置く早桃かな 青山 丈
 寒鯉のむつくりと顔上げにけり 好井 由江
 かの佳句を選びそこねし初句会 遠藤若狭男
 おのが句を誰も選ばぬ初句会 々
 缶蹴りや花樽から二三人 西池 冬扇
 槐 二月号
 栗飯は栗の話をして食べる 高橋 将夫
 大切な日は真白な古日記 柳川 晋

路線バスで行く
 里山発、岬行き
 イーハトープから遠野物語へ(岩手) 白濱一羊
 古都鴨川をゆく(京都) 名村柚香
 きらめく湘南の海(神奈川県) 日下野由季
 春たけなわの涌潮(徳島) 船越淑子
 芭蕉の愛した敦賀(色)の浜へ(福井) 中内亮玄
 桜島と錦江湾(鹿児島) 淵脇 護
 作品 茨木和生 松林朝蒼 加藤房子
 戦後70年 大空襲の記憶を詠む
 ○加藤樹郎『火の記憶』に見る
 ○著名俳人が残した空襲の句
 ○空襲の記憶を詠む、函館、東京、神戸他
 発表！ 第14回山本健吉賞 後藤比奈夫
 北斗賞受賞第一作 藤井あかり ●歴代受賞者選詠
 率七レクション結社「扉」坂元正一郎
 私の一冊 山元志津香「八千草」
 魅惑の俳人 磯貝碧蹄館
 佐高信の甘口でコンニチハ！
 鳥飼玖美子 (立教大学教授)

月刊 俳句界 2015年4月号

毎月25日発売 定価1200円(税込)

別冊 投稿俳句界 一流連者26名！ 日本一充実の投句欄

株式会社 文學の森 佐藤喜孝 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳境流連

木の芽雨母のがり行く濡れるため じょう

(二〇一三年五月)

この句の「母のがり」の「がり」のことです。現代、一般には完全に廃れたことばですし、句歌でも頻繁に遣われるわけではない。ですから、今更めてとり上げない方がいいのかもしれませんが、ひとこと説明しておきたい、と。

辞書によると、妹「がり」行く⇨妻の「もとへ」行く、の言い方と、妹「のがり」行く⇨妻の「もとへ」行く、の遣い方の二つがあつて奈良時代には「妹がり」、平安時代には「妹のがり」と遣つた、ということなので同じことなのですが、それが近代、殊に近年は「妹がりに」「妹がりの」と遣うことが多くなつて、中村草田男でさえ

足あとの雪の大路を妹がりへ
と遣つています。

ドイツ文学が専門だったかもしれない草田男ほど日本語を究めた人は沢山いない。そういう方が「妹がりへ」と遣うわけですから、現代「妹がりへ」「妹がりに」と遣つて何ら誤りとはしないわけです。ところが、です。「妹のがり」と正しく遣つたものを「妹がりの」と添削する俳句の先生がいっぱいいる。現代「妹がりの」と遣つて誤りではないとしても、本来「妹のがり」が正しいわけですから、この直しようはやはりまずい、と思うのです。こういう先生は、自らの知識に絶対の自信を持っているわけで、投句者は拙きもの達である、と。

四十年来私と句作りを同道する句寿夫さんに、

母のがり枳に足らねど早生の粟

があり、参加句誌に採られて、「母がりの」に直されていた、ということがありました。

辞書を信頼しすぎるのも問題がありますが、辞書

を繰ることをしないのはもつと問題があると思うのです。

立春や尾氐骨から尻尾かな

恭子

(二〇〇一年三月)

新潟に永く住んでいたせいか、冬は炬燵が好きだ。六十数年前の話だが、炬燵に入つて学校が休みの日は一日中本を読んでいた。冬は外であそぶと言つても雪が降っていたり震だつたりと遊ぶ環境は悪い。そこで炬燵に寝そべつて一日過ごした。時には店番もした。父は一日中下駄を作っていた。戦争から帰つて来てお巡りさんから職人になったので、大変だつたらうなど今にして思うことがある。

中学生になると、母が苦手だったのか芸者置屋さんに月末になると集金に行った。

昼の顔と夜の顔が違ふと他所の人は言うがおねい

さんたちは優しくかった。「ちよつと待つてね」と奥から懐紙に包んだお菓子やら時には小銭も頂いたこともあつた。

これも昔のいい思い出になっている。なんでも経験できたのだから。

冬の寒い時期は何となく座っている時間が多いような気がする。そろそろ立春ともなると動きが少しづつ活発になつてくる。と、ふと思つた。押しつぶされていた尾氐骨のあたりがムズムズしているようだ。

三宅島の珍鳥の来て庭芽吹く

藤穂

(二〇〇二年二月)

私は毎日茶の間の炬燵からガラス戸越しに庭を眺めているので、雨が降つてきても風が吹き出してもすぐにわかります。狭い庭の向うはお隣の塀でそ

の向うはお隣の庭で、桜・山茶花・榎・椎・杏・ポポー・楓の木が塀に沿ってあります。私の座の真正面にあるのはポポーで、隣家の方がハワイで買ってきた種から今やすっかり背が高くなって常緑の葉をつけていますが、ポポーであるか真偽の程はお隣もよくわからないそうです。

田端のこの辺りも昔は一軒が二、三百坪で庭も樹もありましたが、今はもう庭を残しているのはお隣とうち位、わが家の狭い庭も人からは羨ましがられます。そのせいかこの頃前にも増して小鳥が来て、蹲踞の水を飲んだり水浴びをしたり土に降りて何かついばんだりします。私も目が悪くなってパツと見て何だか解らない小鳥も増えました。きれいな尉鶉が連日来て眼前に色を振りまいてくれます。

さて、あれは一月二十三日の昼前のことです。木造二階建のお隣の一階の屋根に大きな白い動物がいたのです。ポポーの葉の間から見えたのですが、猫ではない。犬は屋根に居るわけがない。鶴？白鳥？

畦塗は天下一品お父ちゃん

裕子

(二〇十三年七月)

春になると兼業農家の我が家でも田植えの準備が始まる。冬の間放っておかれた田圃の土手や畦の草を刈り取りきれいにする。そして耕耘機を頼んで田圃の土を鋤き返してもらう。土起しが終わると、田圃に水を張るのだが、その前に水が漏れないようにしっかりと畦塗りをする。これはとても大切な作業で、父はこの畦塗りに心血を注いでいた。鍬で畦を整え表面に土を塗り固めていくのだが、父はいつも左官やさんが壁塗りに使う籠を使って、丁寧に仕上げ上げていった。父の仕上げた畦は、上面と壁面の交わりがきれいな直線を作り、それはそれは見事なものだった。まわりの人達からも、「定治さんの畦は手が込んでいて立派なものじゃ。いつも天下一品じゃ。」と評判だった。水を張られた田圃にまわりの景色が映る。その田圃を縁取るように塗られた

この辺に居るわけがない。驚きと不思議で私の心は狼狽えました。私が立ち上ろうとした時、その白いものは空へ飛びました。私の家の屋根の方へ飛んだので、しっかりと確認するひまがありませんでしたが大きな白い鳥でした。私の家は上野の不忍池と駒込の六義園、旧古川庭園の間にあるので、上空を大きな鳥が飛んでゆくのは折々見かけますが、その鳥が地上や屋根に降りたのなど見たことがありません。でも私は見たのです。夢でも認知症でもないのです。誰かこの御近所で大きな白い鳥が舞い立ったのを見た方はいないでしょうか。きつとあの鳥は、不忍池辺りに棲む白鷺かと思います。こんな所に降りて休んだのはちょっと病気が怪我でもしていたのか……

夢の様で夢ではない。あれ以来私はちよつと心が不安で、誰か、私も見たという人にめぐり合いたいのですが。

父の畦は、まるで鏡の額のようにだった。子供ながらに誇らしい思いで、父の塗った畦の田圃を眺めたものだ。父の塗った畦から水が漏れる事はなかった。

れんこんの穴のここのつ虚子忘なり じょう

(二〇十三年七月)

随分以前のことですけど、投句していた俳誌にへそのかみの三くだり半のゆすらうめが採られたのでした。

『あを』誌の「自詠自読」は、「自作を落語の枕ようにして」随筆を書くわけですけど、当時流行った自句自解のページは、まさに自分の句を鑑賞しなければならぬ。その自句自解の依頼があった時、はたと困ったのでした。凡そ句を作る時、そんなことを念頭におく人は少ない。いわば作りっぱなし。私もそうだった。

思案の果て、句会でこの句を唯一人とつてくれた先輩のおるさんに理由を問うたのでした。「リズムがいいからとつたんであって、格別の理由はない」との返事をもらって、少々がっかりしたのでした。そしてこんな時は否定的に鑑賞した方が宜しいことを知っていた私は、「そのかみ」はポジティブな場面で遣うことが多いこと、だから三行半のようなネガティブなことばにはそぐわないこと、それでも遣ったのは、江戸時代には鎌倉東慶寺のような駆込寺があるほど女性の方で離縁状を欲したことがあったこと。そしてゆすらの実は女性を象徴していること、等々。句友が評して「ちよつと苦しかったね」と分る人にはばれてしまうのでした。

さて掲句です。『あを』にのつた時佐藤さんが、こういう例句が他にもあるよ、とれんこんの穴の句を紹介してくれました。蓮根の穴は八つの種類と九つの種類とあるそうですがそれはともかく、やっぱり先句があったわけでここでもがっかりしたのでし

ない！後ろ！」と叫んだり、クライマックスには拍手もした。

十年程前の夏に、銀座で吟行をした折、京橋のフィルムセンターを見学した。其処で古い映写機、カメラ、無声映画の台本等を見た時、小学生の映画会の夜の記憶が蘇った。懐しさと、暑さと、機械油の匂いを感じた。

のど仏良く動くなる自然薯

幸江

(二〇十三年七月)

自然薯と長芋が兄弟だったなんて知らなかった。あっそうそう山芋も姉妹だったのね、どれもスリムで細身。最近、ねばねば食ブームで私も納豆、オクラなんかよく食べる。宅急便の箱に五本入って送ってくれた友人、本当に有難う。大抵の頂き物は、子供達、近所の友人知人に食べて頂いた。が、これ

た。しかし喜孝さんは「一風変わったおかしみをそなえ、それでいて虚子忌への挨拶句にもなっている」と上手に鑑賞してくれて。

れんこんの句を仮に自句自解しろ、となったら「ゆすらうめ」の句と同様しどろもどろなっていたに相違ありません。

映写機の油のほひ夏休

純子

(二〇〇六年九月)

小学校の低学年の頃、夏休みの夜に小学校の校庭で、映画会があった。どんな映画だったか記憶が無いが、たいした印象に残らないものだった。子供達それぞれが、敷物を持ってわくわく出掛けて行った。5.4.3.2.1と映像の数字をみんなで叫んで興奮していた。暗いし、非日常的な状況に、ドキドキしていた。危険の迫る主人公の後ろに敵が…「危

だけは私の床下に新聞に包み隠してある。去年の私はよく食べた。しかし五本の芋は残り一本の $\frac{1}{2}$ だ。最後に芋を食べるのはバレンタインの夜、よく動くのど仏とね。

三つ峠むらさきだてる初冬かな

石動

(二〇十四年一月)

我が甲斐国は、山国。

県都・甲府は盆地、大月は山間辺地。小さい頃は、雲は山の端から昇るもの。長じて、関東平野の「浮雲」を見て、『ああ、シェーンのあの雲だ』と、大いにびっくり感動。

住地から西方にこの「三つ峠山」が指呼。この山には電波塔やNHKの定点カメラが設置されている。NHKが富士を映すときは、この三つ峠カメラからの映像が度々。

この山を西に降りると、太宰治の「月見草がよく似合ふ」で有名な御坂峠「天下茶屋」。そして河口湖へとなる。

この山には貴重種の草花が多く存するらしいが、ご多分に漏れず、鹿害と盗人害にて、年々減少とのこと。愚妻は、それを守るべく、労働奉仕に参加している由。そんな彼女が、私の手を引いて（へ妻は夫を労はりつ、夫は妻を慕ひつつ〜う。イヨツ浪速亭綾太郎！）この山に誘ってくれたのは、雪残るころ。

平安の女官は、雲がむらさきだつと詠っています。我が甲斐国では、ことに晩秋から初冬の暮れ方に西方の山々がむらさきだちます。もちろんこの三つ峠山も。―その色合いに、胸がキュンとします。この「キュン、」が無くなれば、吾枯れたり、吾老いたりとなるのでしようが、今も「キュン」ですの。で吾いまだ青春……………です。）

は、いまみても思考が止まります。わたしは困ったときの神頼みとばかりにどの神様にお願ひしたらよいのやらと探し、ウマシアシカビヒコヂノミコトといふ神さまを知りました。

ウマシアシカビヒコヂノミコトは、海月なす大地から、葦の芽に生じた。日本に最初に誕生した神といふ。（天照大神は日本が出来る前に居た神）ウマシはアシカビの美称である。アシカビは葦の芽（牙）のこと。葦の芽の神格化が、ウマシアシカビなのである。ヒコはヒメの反意語で、「男」を表す。

といふことで泥の中から萌えいづる葦の生命力を神格化した神に、復興の願ひを託しました。四年経った今、神さまは別に居るやうに思へてきました。復興の旗印の下にさまざまな人が力と知恵を出し働いて居る。この中にも神さまが居る。救助物資を受取る秩序だった列を見て海外の人が驚かれたとニュースで見た。こんな所にも神さまが居る。神さまは人

巨津波可美葦牙彦舅神よ

ウマシアシカビヒコヂノミコト

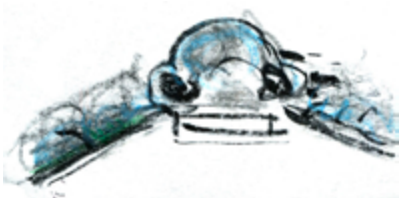
喜孝

（二〇一一年四月）

三陸を大津波が襲ったとき、インターネットでの津波や原発事故の災害に対して俳句を募集しました。俳句は平時の時だけ詠むものではないと思ひこんでゐるので…………。後日それぞれの場所で俳人がこのことを詠まれてゐたことを知りました。俳句をと呼びかけたとき匿名子からクレームのメールが来ました。そのメールは壊れたパソコンとともに消しましたが「第三者がこうゆうことを詠むのは不謹慎だ」といふ大意でした。わたしの初学の師は「平時の俳句はある意味だうでもよい、一朝事あるときに力を出せるやうに平時句作に努めなければならぬ。」とよく言はれました。近時、このことを体現してくれたのが齊藤裕子さんです。

あの絶対的な力を持つて押寄せる大津波の映像

の心の中に棲んでゐるのかも知れない。そんな尊敬できる人々が住んでゐる、地球には。





2

水 八田木枯 この句集は『あを』創刊十周年記念の句集。限定一部で二〇一〇年十一月発行。あを句会への投句を纏めた句集です。ゴシック句は『鏡騒』と同型句。また『鏡騒』と異形句は下揃へにして参考に載せました。

罫線よりはみだして鳥歸りけり
彌生盡和菓子いろいろ色いろいろ
男老いあやめの句をみのがさず
句にまじる毒こそよけれ五月果
ゆふぐれのはじめの刻や花あやめ
忘れ扇うらがへりたる疊かな
母の櫛銀河の淺瀬にてひろふ

秋すさび櫛は流れて沈むとや
色鳥やべつこういろに日の暮れて
捨てし櫛さがすすべなし眞葛原
偽善者のごとし燈下の柿のいろ
月も穴大根をぬきし穴穴穴
秋愁ひ窓すぐしめることはせず
行秋の家に居付くや柱影

雪ふれり寝るときがきてみんな寝る
蕪畑素しらぬ顔でたもとほる
枯萩の方をつまらなさうに見る
鶴病んで皿は裏まで藍ながれ
骨牌とぶ闇のあなたのなほあなた
おほぞらは正方形に寒に入る
梅ごちや手前にひらく厠の戸
梅咲くはをかしかりけり生くも亦
紅梅や雲はあくまで空のした
人編はさびしからずや雪がふる

雪淡し窓を見てゐる窓の人
春あさし家の空気を外へ掃き
伏せ字こそよろしきものを春の雪
かなぶんがざりざり歩く頼信紙
春晝は大きな穴や素老人
とこしへに人は地上に春のくれ
はじめから一つなりけり梅雨の月
梅雨ふかし家を出るとき家にふれ
蠅叩御國の爲と言ひながら
空よりも水美しと櫻桃忌

殺蟲劑まつくらがりに屹立す
松蟬や涙は兩眼よりいづる
夏久しちぎれるほどに振りし旗
梅雨鴉數の一つになって飛ぶ
夏いとし兩手兩足うごかして
けものたち肝に銘じし寒四かな
大寒や人は地上に口ひらく
木の箸の割れてにほひす一に午
大寒の水はうごいて湯となりぬ
戦前に彌まさるもの火鉢の火

戦争が來ぬまに雛を仕舞ませう
夜半の雛こころまかせの風が吹く
寒食や父の齡の倍も生き
紙ひひな戦争前夜かもしれず
入口があつて出口のなき衣更衣
枝垂櫻しだるる力ぬきにけり
花冷のふかき器にももの翳
朝寢して軒なき家でありにけり
牡丹散らし夜あらしといふきざな奴
春眠の身にのこりたる雨の音

くろがねのやがてしろがね蠅生る
插穂していちにち雲をとりこにす
甲斐にをり霧のふかさの計られず
降る梅雨のひそめる音の疊かな
旅の身に甲斐の穴山霧襖
あめんぼう跳ねたり旅の徒然に
雑草の丈荒梅雨は荒るるまま
晝寝どき入谷深路地釘打つ音
我鬼の忌の古二階家の雨戸かな
水を以て水を送れり夏の國

釣堀の四隅の水に雨がふる
河童忌のさらばへしわが助かな
ひらかなでかけばもつるまんじゆしやげ
柄を立ててしづこころなき一葉かな
こぼると言へはぬかごのことなりけり
鯛焼のぬくみ目つむりたきぬくみ
鯛焼の腹のふくみのふくらみ來
目つむれど動きやまざる芒かな
のつけからゆれるつもりの芒かな
おほぞらやいちにち小春日を宿し

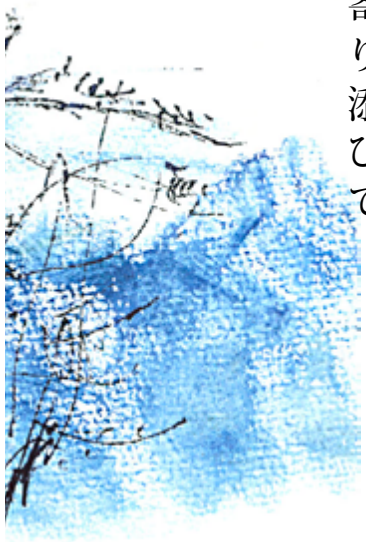
秋から冬へ

佐藤恭子

狭霧はや隠しはじめし峰辺かな

ねこじやらし片身かたみと寄り添ひて

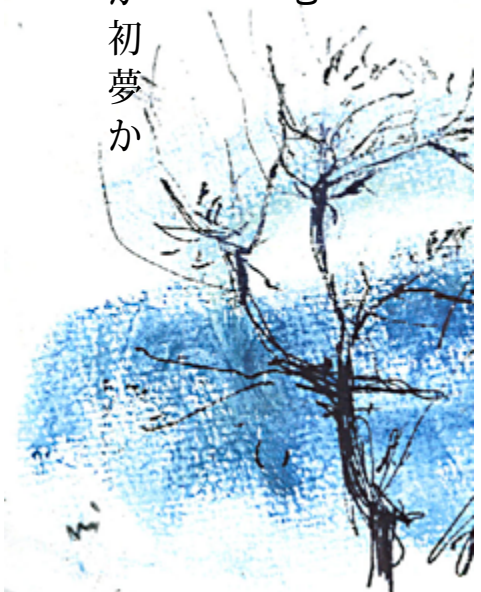
息白し犬と猫鼻つき合うて



冬の蠅関東ローム層に埋む

うなさかにたちてうつつか初夢か

初雪や上枝下枝と降り渡る



鞆轡をこいであのよへ行き帰る

戦争は忘れぬうちに駒廻し

春節は中国のみならず、全世界の色彩の鮮やかな版画」と春聯（春節を祝うために正月にめでたい文句を赤い紙に書いて門口に貼るもの）を貼ったり、ご馳走の鳥や魚などを買ったたりして、年越しの用意をしておく。大晦日には家族そろって夕食を食べる。春節の料理としては、「吉祥如意」、「年年有余」という願いを込めて、必ず鶏（吉と同音）、魚（余と同音）が加わる。新年の鐘が鳴る前、みんなは魔除けの爆竹を一斉に鳴らし、新年の到来を祝う。翌朝、子供たちは家族の年配者に対して長寿を祝う言葉を述べ、お年玉も頂く。その後、近隣住民や知人と春節を祝う言葉（過年好）を述べ合い、これを「拜年」と謂う。僕の故郷では春節になると、どの家にも赤い灯籠が高々と掛けてある習慣もある。子供の頃、父と一緒に赤い灯籠を掛けるための樹幹を山へ伐りに行ったこともある。今は懐かしい思い出になった。

あとかき

「自詠自読」といふ題がわたしの意図とそぐはないことに気がつきました。そこで今回は王岩さんにお願ひして「俳境流連」と付けていただきました。流連は名残を惜しむといふ謂いださうです。日本語読みですと「いつづけ」とも読みます。名残を惜しむから長居をする理屈ですね原稿お待ちします。（喜孝）

新会員のご紹介

赤座 吉保様 東京都清瀬市
秋川 泉様 埼玉県川口市

二〇一五年三月号

発行日	三月八日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090 9828 4244
ファックス	03 3371 4623
印刷・製本・レイアウト	竹僊房
	カット／松村美智子・テイリ エイマ
	表紙・佐藤喜孝
会費	一〇〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替	00130655526（あを発行所）
	乱丁・落丁お取替えます。